



特集 「新教科書」— これからの英語教育

# 『MY WAY English Expression I』の 編集方針と内容紹介

— 英語のしくみを学び、  
論理的な表現力を養う —

同志社女子大学 飯田 毅

## はじめに

昨今の経済におけるグローバル化の影響を受け、これからの世代を担う多くの高校生たちは今後ますます英語を使ってコミュニケーションをする機会が増えてきます。そのような時代背景の中で、「英語表現 I」の教科書である My Way English Expression I (以下、My Way) の目標は、生徒一人ひとりが言語能力と言語感覚を磨き、明確な論理展開の方法と表現力を培い、将来、諸外国の人々とコミュニケーションが取れ、ひいては親密な人間関係を築いていける態度を育成することにあります。

今回の新学習指導要領では、一段と生徒のコミュニケーション能力と態度の育成が強調され、新たに「英語表現」という科目が生まれました。My Way では、その趣旨を最大限に活かし、高校の現場で先生や生徒が何よりも使いやすいことを念頭に置き、生徒が基礎から英語が学べ、論理的な表現力を身につけ、文化や言語に気づきながら、総合的な言語活動に至る教科書作りを目指しました。

## 英語のしくみを理解して、論理的に表現する

「私の高校では、学習指導要領にあるような総合的な言語活動ができない」とよく言われるのを聞きます。実際、私自身中学の教師をしていた時に同じようなことを感じていました。しかし、私自身の試みが私の考えを変えました。それは、20数年前の研究授業で、日本の中学3年生がオーストラリアの同じ中学3年生に国際電話をかける、という実践を行ったことです。当時はインターネットや携帯電話などない時代、いわゆるダイヤル式の黒電話の時代です。この授業を実施するために、事前に綿密な計画を立て、教室内の生徒全員が会話の内容が聞こえるようにしました。その結果、当日生徒はオーストラ

リアの生徒とお互いに質問し合うことで、理解し合い、ささやかではありましたが、心のこもった交流ができました。この実践から私は、生徒の到達すべき目標を明確にし、段階を踏まえて、系統的な指導をすることで、中学生でも総合的な言語活動ができることを実感しました。しかし、このような活動はとすると「電話で質問し、答える」という活動だけに焦点が当たってしまいます。つまり、その活動だけに必要な文法事項、文型、語彙だけを学ぶというきらいがあります。高校の英語では、ただ単にコミュニケーション活動を行うだけでは不十分です。高校時代は、中学の基礎に基づき、英語でより高度なコミュニケーションができるための文法・文型や語彙の知識を同時に身につける時期でもあります。特に言葉のしくみの基本である文法・文型に関しては、ぜひ高校時代に身につけておきたいものです。また、高校時代は社会性や論理性を身につけられる時期です。そのために、本教科書では、題材に配慮し、文化や言語に対する気づきや論理性を身につけられるようにしました。では、本教科書の特徴を7項目に分けて述べてみましょう。

## (1) 英語のしくみを学び、speakingとwriting活動に導く

前述したように、My Wayでは英語のしくみである文法・文型を重視します。しかし、英語のしくみだけでなく、最終的には実際に生徒が教室で表現活動ができることに狙いがあります。では、なぜ言葉のしくみから学んでいく必要があるのでしょうか。日本でも最近はいまージョン式英語教育といって、目標言語である英語そのものを学ぶのではなく、目標言語を使って教科を学ぶ学校が増えています。いまージョン式英語教育は、英語を使用するという点では非常に有効です。しかしながら、とすると英

語を正しく使うという点では、問題があることが分かっています。実際、最近の第二言語習得理論でも、例えば、Focus on formに見られるように、意味を重視しながら形式である文法・文型をどのように教えるのかということに研究の焦点が移っています。このような状況の中で、日本の普通の高校生が英語を身につけていくためには、今までのようにただ単に文法を理解するだけではなく、理解した上で、それを生徒の身近な場面に置き換えて実際に使うという視点が重要です。そこで、My Wayの本課である毎回のLessonでは、文法・文型をLearn!の所で学び、Practice!で練習し、Use!で自己表現活動を行います。そして、活動の最終段階に、総合的な言語活動であるProject Workを取り入れました。

## (2) 文法シラバスをコミュニケーションに活かす

Communicative Approachが導入された頃、文法シラバスが変わって、Notional Functional (概念・機能) シラバスが提唱されました。確かに英語教育史上では、画期的な出来事でした。しかし、概念・機能シラバスが文法・文型と必ずしも明確な対応がないこと、英語の文法大系が日本語の文法大系とかなり距離があることから、日本の高校生にとっては必ずしもそれが良いとは限りません。むしろ、日本語とは異なる言語体系を持った英語の文法事項をまとめて学習した後に、コミュニケーション活動をする方が能率的であると言えます。そこでMy Wayでは、5つのUnitからなる文法事項のまとまりを作り、その中で体系的かつ意味を重視した指導ができるように工夫しました。例えば、Unit 1では、日本語と大きく異なる「英語の時制」を扱い、中学校で学んだ時制を含めて英語の基礎的・基本的な時制を学びます。Unit 2では、助動詞を話者の心的表現と捉えます。また、受動態の形式だけを指導するのではなく、受動態が使われる際に重要である「話し手の視点」という観点から取り扱います。つまり、一つの出来事を表現する際に、話し手が何を主語にするかによって文が能動態になったり、受動態になったりするという事です。また、それぞれのUnit終了後には、Unitで扱った文法を復習します。さらに、生徒の文法に関する意識を高めるために、英語のしくみとコミュニケーションを結びつけたGrammar for Communicationというコラムを設けています。

## (3) 中学校と高校の橋渡し

小学校の英語教育が始まり、小・中との連携の重要性が言われていますが、中学と高校の連携も古くて新しい問題です。私自身、高校生になった時に、高校の英語の授業に戸惑ったことがあります。その最も典型的な例は、基本的な文法用語を知らないことから起こる問題です。高校の先生が何気なく使っている文法用語がわからず、英語が急に難しくなったと感じる高校1年生が多いからです。文法用語の知識と英語力の間には何も関係がありません。文法用語は、本来英語のしくみを理解する際に便利な言葉です。その便利な言葉が生徒の理解の障害になる場合があります。そこでMy Wayでは、教科書の本課の前に、Get ready!という復習のページを設けて、英語の文法の基礎を身につけると同時に基本的な文法用語を理解できるようにしました。その中には、例えば、高校生にとっては難しく感じる英語の冠詞の用法の基本が、名詞の単数・複数とともに解説されています。またMy Wayでは、生徒が目的を持って文法事項が学べるように、Unitの最初はその中で扱う文法事項の要点をわかりやすく図にまとめ、Unit内で扱う文法項目間の関係もできる限り関連づけられるように示してあります。

## (4) Lessonに含まれる様々な活動

それでは、見開き2ページになっている1つのLessonについて、少し詳しく述べてみましょう。生徒は、写真を見て正しい英文を選ぶlisteningの活動から入ります。次に、Learn!の段階では、目標となる文法項目の2つの基本文とそれに関連する例文が、簡潔でわかりやすい解説とともに示されています。例文は、該当する文法項目から高校生にとって必要とされるものを選び、Lessonのテーマに沿ったわかりやすい英文にしました。次に、目標となる文法項目の理解度を確かめる簡単なCheckがあります。ここまでき見開きの左側のページです。右側のページは、練習問題であるPractice!と、目標となる文法項目を使って生徒自身が文を書き、話す活動を行うUse!です。練習問題といっても機械的な練習ではなく、意味を考えた練習問題が含まれています。例えば、Grammar in Useでは、目標となる文法事項を使った50 words程度のまとまった文章があり、英語を聞いて、空所を補充するdictationの活動

と全体を通して音読する活動が含まれています。また、生徒の理解を助けるために、右側にその文章に関する日本語のOutlineが示されています。Exercisesでは、目標文法事項に関する練習問題が易から難へと配列されています。そして、最後にUse!があり、ここで生徒は、目標文法項目を使って、自分の考えや経験したことなどを英語で書き、話す自己表現活動を行います。

### (5) 題材や例文から文化や言語に対する気づきを促す

文法の参考書にはあらゆる文法・文型と詳しい説明が書かれていますが、欠点として、生徒が表現したい一貫したテーマに基づいては書かれていません。My Wayでは、それぞれの課ごとに、ゆるやかに統一されたテーマがあります。例えば、Lesson 8の見出しは「興福寺の阿修羅像」となっています。全体が阿修羅像の話ではなく、日本の伝統文化を扱いながら、Grammar in Useでは阿修羅像がテーマになっているのです。また、練習問題には「江戸時代には梅の花が好まれていた」、「アイヌ語はかつて北海道で多くの人々に話されていた」というような伝統文化や言語に対して、生徒の気づきを促すような例文も多く含まれています。

### (6) 論理性を養う3文writing

Unitの最後には、全体をまとめた文法問題とともに、Write a Paragraph!という活動が設けられています。この活動の目的は、Use!で行ってきた1文の英作文を3文のparagraphにすることです。最小のparagraphではありますが、生徒は「導入」「展開」「結論」という指示に従って、文と文との論理関係を理解しながら、英語で文章を書いていくこととなります。本格的なparagraph writingについては、My Way English Expression IIで扱うこととなりますので、ここではその基礎と基本的論理関係を学びます。大学生でも文と文の関係を意識しないで英語の文章を書く学生が多いことから、この段階から文と文との論理関係を考えさせることが大切です。

### (7) 総合的な言語活動 (Project Work)

Project Workは、それぞれのUnitの最後に全体で5つ用意されています。この活動の目的は、生徒の

総合的な言語活動です。例えば、Project Work Eでは、ペットについてのspeechをします。その際に、モデルとなるspeechに関して聞き取り、要点を読み取ることが第1段階です。次に、モデルを基に異なった立場からspeechを組み立てていきます。まず、与えられた中から理由を2つ選び、また自分で理由を1つ考えます。次に、それらを基にspeech全体の構成である「あいさつ」「主張」「つなぎの表現と理由1」「つなぎの表現と理由2」「つなぎの表現とあなたの理由」「結論と終わりのあいさつ」と書かれた表を整理していきます。この構成表は、文と文の関係を考えさせながら書かせるためのものです。すなわち、生徒に論理性を身につけさせるものです。このようにして、生徒は論理的表現について注意しながらspeechを書き、最終段階として発表します。ここで重要な点は、speechをする際に書くプロセスを重視していることです。また、話す際に注意すべき点として、Tips for Speakingというコーナーが設けられ、話す際の発話・態度にも注意を促しています。

### 英語で行う授業

最後に「英語で行う授業」に関して簡単に述べておきます。本教科書を使って、英語で授業を行うことは可能です。しかし、英語で授業を行うことが目標ではなく、それは生徒のコミュニケーション能力を育成するための一つの手段です。本教科書の文法解説は、学習指導要領の解説にもあるように日本語で行うべきです。最近のBilingual教育でも、目標言語である英語で授業を行う中で、母語である日本語をどのように効果的に使っていくかが課題になっています。ぜひ、My Wayを手にとってご覧ください。

